

## 思春期体験学習の効果

(分担研究：乳幼児期からの情緒の形成に関する研究)

石川 清美\* 小林 正夫\*\* 清水 凡生\*\*\*

### 要 約

思春期体験学習は、中高校生の乳児や育児に対する認識に肯定的に影響することがわかった。また、個人の中にある対児感情の接近感情と回避感情、つまり受容と拒否の感情の相克は、その生徒の体験での動機づけや行動を阻害する方向に影響すると考えられた。

接触経験の多さが、乳児に対する肯定的な感情を促進していた。しかし、体験学習における体験項目が少なくとも、乳児に対する拒否的な感情の緩和には効果が期待できると思われた。

今後は、感想文などとの総合的な評価とともに、体験前の対児感情得点から体験時での対応を考えることに発展できよう。

### 見出し語

思春期体験学習 父性 母性 親

### ■ はじめに

育児は、その子どもの特性や育児環境などの、個別的な状況にあった判断や対応を要求される。それは日常的な経験や相互関係を通して学んでいる事が多いはずである。しかし現代社会

では、少子化や核家族化により家庭の中で、思春期までの間に育児について経験を通じた積極的な知識を得ることが少ない状況にある。また地域社会の中で人間関係が希薄になっているために、ごく日常的な育児に関する周囲からの援助が受けられず、孤立した親が増えてきている。特に新米の親の育児能力は、その個人のそれまでの経験と周囲の日常的援助により助けられる。しかし、乳児に触れた体験もなく、また孤立した状態と情報の氾濫の中で、育児に直面する未熟な親たちが戸惑うことも多いと思われる。この対策の一つとして、意図的な乳幼児との接触の機会である思春期体験学習がある。これは平成5年から始まり、思春期に

おける保健福祉体験学習の一つである。この乳幼児とのふれあい体験学習は、思春期の間に意図的に乳幼児との接触の機会を作り、生命の尊厳や性に関する教育の機会とし、父性や母性の涵養を図ることを目的としている。

このような社会的背景の中で行われている思春期体験学習が、乳児について知る機会となり、生命の尊さや育児について考える機会となることは、これまでも報告してきた1)とところである。今年度は、体験による中高校生の意識の変容について、過去4年間の参加者に対象を広げて検討した。さらに、今年度は乳児に対する感情(対児感情)と体験学習での体験内容との関係について新たに検討に加えた。

### ■ 研究方法

#### 1. 調査対象とした思春期体験学習の概要

体験学習に入る前には、それぞれの学校で育児

\* 広島県立保健福祉短期大学看護学科 \*\* 広島大学医学部小児科学教室 \*\*\* 広島大学教育学部幼児保健学教室

についての何らかの授業がなされている。体験学習では、乳児1名に対し生徒1-2名が、乳児検診の過程を通じて共に過ごし、乳児の抱っこや着替えなどを経験し、また母親の乳児に対する関わり方や乳児の反応、また保健婦や母子保健推進員などの乳児と母親への対応を観察することができる。体験に費やす時間はだいたい1~2時間程度である。

## 2. 調査1

平成5年度から平成8年度までの4年間に、静岡、兵庫、広島県の1市4町村で実施された思春期体験学習をアンケート調査により評価した。調査対象は、乳児検診に参加した中高校生462名である。

アンケートは学校での事前学習前と体験学習の終了後で行い、乳児とのふれあいによる中高校生の認識の変化を見た。内容は「祖父母との同居の有無」「年下のきょうだいの有無」「これまでの赤ちゃんとの接触経験」などの背景要因の他、「赤ちゃん」「育児」「親」「体験学習」などについてのイメージや認識について独自に設定した項目を択一選択方式で尋ねた。有意差検定には対数-線形モデル分析を用いた。

## 3. 調査2

さらに平成8年度においては、広島、兵庫県の3町村の乳児検診に参加した中高校生162名を対象に、次のようなアンケート調査をおこなった。アンケートは、花沢2)の対児感情評定尺度を用い、乳児に対する肯定的、否定的な感情を表す形容詞各19項目合計28項目について、思わないから大変そう思うまでの4段階の該当個所に回答させ、それぞれ0~4点の得点評価をした。質問項目は肯定的、否定的項目を交互に配列し、さらに体験の前後ではそれぞれの配列も替えた。花沢と同様に肯定的感情を乳児に対する接近感情とし、否定的感情を回避感情とした。それぞれの得点で得られた乳児に対する感情の体験前後での変化と、それまでの接触経験の影響や、乳児検診での体験内容の違いとの関係について評価した。体験内容は、「抱っこ」「あやす」「遊ぶ」「着替えを手伝う」「オムツを替えるのを手伝う」「お母さんと話をする」「授乳や離乳食を介助する」「何も触れないが身体に触れる」

以上の体験項目と体験なしの項目として「見ていた」「赤ちゃんに近づけなかった」の10項目について該当項目を回答させた。

検定は、t検定を用い、独立2群の比較には、分散の検定Levene検定をした上でt検定をおこなった。

## ■ 研究結果

### 1. 調査1

#### 1) 対象者の背景

対象者は、中学生372名、高校生90名の計462名であり、男子221名、女子241名で若干女子生徒の方が多い。中学生は授業の一環として参加し、高校生の男子参加者21名は、全員自ら希望して参加している。「祖父母と同居」している者や「年下のきょうだい」がいる生徒は、男女とも約半数を占めている。「赤ちゃんと遊んだり、抱っこ」を経験した生徒は、70%前後いる。しかし、男子生徒の約40%は、これまでに全く乳児と接触した経験がない。一方女子生徒の80%以上は、「赤ちゃんと遊んだり、抱っこ」を経験しているが、乳児の衣服やおむつを替えた経験は、それぞれ25.7%、46.1%である。男子生徒で、乳児の衣服やおむつを替えた経験をしている生徒は、11.4%、8.6%とかなり少ない。(表1、表2)

表1 対象者の背景(n=462)

年齢構成		男子生徒	女子生徒	n(%)
				全体
中学生	200( 90.5)	172( 71.3)	372( 80.5)	
	21( 9.5)	69( 28.7)	90( 19.5)	
祖父母同居の有無	同居	128( 57.9)	127( 52.7)	255( 55.2)
	非同居	92( 41.6)	113( 46.9)	205( 44.4)
	不明	1( 0.5)	1( 0.4)	2( 0.4)
年少のきょうだい	あり	107( 48.4)	130( 53.9)	237( 51.3)
	なし	114( 51.6)	111( 46.1)	225( 48.7)

表2 乳児との接触経験

	乳児との接触経験			
	全く無い	少しある	多い	不明
遊び	113( 24.5)	246( 53.2)	95( 20.6)	8( 1.7)
抱っこ	133( 28.8)	251( 54.3)	65( 14.1)	13( 2.8)
着替え	322( 69.7)	115( 24.9)	21( 4.5)	4( 0.9)
おむつの交換	375( 81.2)	69( 14.9)	12( 2.6)	6( 1.3)

## 2) 体験学習に対する認識

ふれあい体験学習については、「参加したくない、あまり乗り気でない」生徒は、24.7%である。しかし体験学習終了後は、今後の体験学習について「楽しみ」と回答した生徒が76%を占め、体験学習をする前の57%に比較して増加している。また男子生徒の45.9%が、体験前には「したくない、気がすすまない」と答えているが、体験後では24.4%に減少し、逆に「今後の体験が楽しみ」とした生徒が過半数を占めた。(表3)

表3 ふれあい体験について

	体験前	体験後
①したくない*	32( 6.9)	13( 2.8)
②あまり気乗りしない*	82( 17.7)	46( 10.0)
③少し楽しみ**	149( 32.3)	208( 45.0)
④非常に楽しみ*	116( 25.1)	133( 28.8)
⑤わからない	75( 16.2)	53( 11.5)
⑥その他	8( 1.7)	4( 0.9)
無回答	0( 0.0)	5( 1.1)
合計	462(100.0)	462(100.0)
	(%) ** P<.01 *P<.05	

## 3) 育児や親に対する認識

育児については、体験前は「忙しい」印象を持つ生徒が191名(41.3%)と圧倒的に多く、肯定的な項目の割合は少ないが、体験後は「素晴らしい、楽しい、面白い」などがそれぞれ有意(p<.01)に増加している。わからない(p<.01)や何とも思わないは減少している。(表4) 「赤ちゃんを育てる母親」については、「楽しそう」は3.7%から16.7%に、「幸せそう」は10%から21.4%に、そして「生き生きしている」が9.3%から13.9%に、体験後はそれぞれ

表4 育児について

	体験前	体験後
①めんどろ*	36( 7.8)	19( 4.1)
②いそがしい**	191( 41.3)	123( 26.6)
③苦しい	22( 4.8)	17( 3.7)
④面白い**	11( 2.4)	33( 7.1)
⑤楽しい**	31( 6.7)	63( 13.6)
⑥素晴らしい**	56( 12.1)	104( 22.5)
⑦幸せ	57( 12.3)	71( 15.4)
⑧何とも思わない	12( 2.6)	6( 1.3)
⑨わからない**	30( 6.5)	8( 1.7)
⑩その他	15( 3.2)	17( 3.7)
無回答	1( 0.2)	1( 0.2)
合計	462(100.0)	462(100.0)
	(%) ** P<.01 * p<.05	

れ有意(p<.01)に増加している。(表5)

表5 育児している母親について

	体験前	体験後
①大変そう	216( 46.8)	140( 30.3)
②忙しそう	47( 10.2)	30( 6.5)
③めんどろさそう	9( 1.9)	2( 0.4)
④きつそう	5( 1.1)	3( 0.6)
⑤楽しそう**	17( 3.7)	78( 16.9)
⑥偉い	39( 8.4)	35( 7.6)
⑦自分も育てられた	12( 2.6)	3( 0.6)
⑧幸せそう**	46( 10.0)	99( 21.4)
⑨いきいきしてる**	43( 9.3)	64( 13.9)
⑩何とも思わない	12( 2.6)	2( 0.4)
⑪わからない	8( 1.7)	3( 0.6)
⑫その他	6( 1.3)	3( 0.6)
無回答	2( 0.4)	0( 0.0)
合計	462(100.0)	462(100.0)
	(%) ** P<.01	

「親が子どもを育てること」についてみると、「当たり前のこと」が22.9%から12.6%に有意(p<.01)に減少し、「素晴らしい」が15.2%から31.6%と有意(p<.01)に増加している。(表6)

表6 親が子を育てることについて

	体験前	体験後
①親の責任	96( 20.8)	70( 15.2)
②親のすべきこと	69( 14.9)	46( 10.0)
③当たり前のこと**	106( 22.9)	58( 12.6)
④素晴らしい**	70( 15.2)	146( 31.6)
⑤ありがたい	75( 16.2)	98( 21.2)
⑥わからない	36( 7.8)	34( 7.4)
⑦その他	8( 1.7)	8( 1.7)
無回答	1( 0.2)	0( 0.0)
誤回答	1( 0.2)	2( 0.4)
合計	462(100.0)	462(100.0)
	(%) ** P<.01	

さらに「一般的な意味での親」については、否定的な項目を選んだ生徒が体験後は減少し、肯定的な項目の割合が増加している。親を「うるさい」と思っていた生徒は、体験により24.0%から9.1%に有意(p<.01)に減少し、「煩わしい、注文が多い、厳しい」も有意(p<.05)に減少している。また体験後有意に増加した項目としては、「ありがたい」が14.9%から28.6%に増加し(p<.01)、「頼もしい、安心感がある」がそれぞれ(p<.05)で有意に増加している。(表7)

## 4) 乳児に対する認識

「赤ちゃんのイメージ」については、体験前後と

表7 一般的な意味での親について

	体験前	体験後
①うるさい**	97( 21.0)	42( 9.1)
②わずらわしい*	23( 5.0)	9( 1.9)
③注文が多い*	40( 8.7)	19( 4.1)
④厳しい*	25( 5.4)	11( 2.4)
⑤威厳がある	10( 2.2)	11( 2.4)
⑥ありがたい**	69( 14.9)	132( 28.6)
⑦たのもしい*	16( 3.5)	29( 6.3)
⑧楽しい	13( 2.8)	17( 3.7)
⑨安心感がある*	80( 17.3)	114( 24.7)
⑩わからない	74( 16.0)	66( 14.3)
⑪その他	14( 3.0)	7( 1.5)
無回答	1( 0.2)	5( 1.1)
合計	462(100.0)	462(100.0)

(%) \*\* P<.01 \*P<.05

もに「かわいい」が最も多い。体験前後で比較すると、「やかましい」は体験前に有意 (p<.01) に高く、体験後は「かわいい、元気、たくましい」などの肯定的な認識を持つ生徒が、有意 (p<.01) に多くなっている。(表8)

表8 赤ちゃんのイメージ

	体験前	体験後
①弱い	20( 4.3)	12( 2.6)
②やかましい**	29( 6.3)	2( 0.4)
③何もできない	12( 2.6)	15( 3.2)
④よく泣く	59( 12.8)	34( 7.4)
⑤かわいい**	230( 49.8)	275( 59.5)
⑥元気**	58( 12.6)	84( 18.2)
⑦大きくなる	15( 3.2)	4( 0.9)
⑧たくましい**	4( 0.9)	13( 2.8)
⑨自分の昔の姿	15( 3.2)	12( 2.6)
⑩その他	20( 4.3)	10( 2.2)
無回答	0( 0.0)	1( 0.2)
合計	462(100.0)	462(100.0)

(%) \*\* P<.01

「赤ちゃんから連想するもの」では、体験前に多かった乳児の直接的なイメージをあらわす「お乳、おむつ」が、それぞれ11.3%から4.3%、19.3%から10.2%へと有意 (p<.01) に減少している。体験後は、抽象的なイメージの「いのち」が9.5%から19.7%に、また「お母さん」を連想した生徒が7.1%から19.5%へと、それぞれ有意 (P<.01) に増えている。(表9)

「赤ちゃんが好きか嫌いか」については、体験後は「嫌い、好きでない」が減少し、「好き、非常に好き」がそれぞれ有意に増加している。(表10)

表9 赤ちゃんから連想するもの

	体験前	体験後
①お乳**	52( 11.3)	20( 4.3)
②おむつ**	89( 19.3)	47( 10.2)
③弟	32( 6.9)	30( 6.5)
④妹	17( 3.7)	15( 3.2)
⑤いのち**	44( 9.5)	91( 19.7)
⑥天使	77( 16.7)	77( 16.7)
⑦お父さん	0( 0.0)	4( 0.9)
⑧お母さん**	33( 7.1)	90( 19.5)
⑨子犬*	10( 2.2)	21( 4.5)
⑩小猿*	53( 11.5)	31( 6.7)
⑪子猫	6( 1.3)	10( 2.2)
⑫かるがも	14( 3.0)	10( 2.2)
⑬その他*	30( 6.5)	16( 3.5)
無回答	5( 1.1)	0( 0.0)
合計	462(100.0)	462(100.0)

(%) \*\* P<.01 \*P<.05

「抱っこすること」は、体験により「いや」が9.1%から1.7%に有意 (p<.01) に減少し、「楽しい、非常に楽しい」が有意 (p<.01) に増加し、「楽しい、非常に楽しい」を合わせると、37.3%から65.4%と約2倍の増加になる。(表11)

5) 体験前の乳児に対する好感度と体験による認識の変化

体験前の乳児に対する好感度を見ると、「嫌い、好きでない」が89名、「好き、非常に好き」が283名である。この両群について「赤ちゃんのイメージ」「子育て」「母親」「体験への参加」のそれぞれの項目を、「肯定的」「否定的」「その他」の3つにカテゴリーに再分類し、体験の前後で比較した。両

表10 赤ちゃんが好きか

	体験前	体験後
①嫌い**	18( 3.9)	4( 0.9)
②好きでない**	71( 15.4)	26( 5.6)
③好き*	193( 41.8)	204( 44.2)
④非常に好き**	90( 19.5)	159( 34.4)
⑤わからない	83( 18.0)	57( 12.3)
⑥その他	7( 1.5)	7( 1.5)
無回答	0( 0.0)	5( 1.1)
合計	462(100.0)	462(100.0)

(%) \*\* P<.01 \*P<.05

群ともに体験後は「否定的」な回答が減少し「肯定的」な回答が増加しているが、有意差検定では参加前に好きでないと回答していた群で、特に大きな差が見られた。参加前に「好きでない」と回答していた群では、「赤ちゃんのイメージ」で、その他が

表 11 抱っこすることについて

	体験前	体験後
①こわい	93( 20.1)	77( 16.7)
②いや**	42( 9.1)	8( 1.7)
③楽しい**	125( 27.1)	180( 39.0)
④非常に楽しい**	47( 10.2)	122( 26.4)
⑤わからない**	140( 30.3)	34( 7.4)
⑥その他**	15( 3.2)	33( 7.1)
無回答	0( 0.0)	7( 1.5)
誤回答	0( 0.0)	1( 0.2)
合計	462(100.0)	462(100.0)

(%) \*\* P<.01

減少し (p<.05)、「肯定的」な回答をした生徒が 22.7% から 66.3% へと増加 (p<.01) している。「子育て」についてもその他は減少し (p<.01)、「肯定的」な回答をした生徒が 10.1% から 41.6% へと大幅に増加 (p<.01) している。また「母親について」も「肯定的」な回答をした生徒が 20.2% から 52.8% へと増加 (p<.01) している。「体験について」は「否定的」が 70.8% から 31.4% に減少し、肯定的が 14.6% から 51.7% へと増加し、それぞれ有意 (p<.01) に変化している。(表 12)

## 2. 調査 2

### 1) 対象者の背景

対象者は、男子 78 名 (中学生 77 名、高校生 1 名)、女子 84 名 (中学生 72 名、高校生 12 名) の計 162 名である。過去の乳児との接触経験については、抱っこしたことも遊んだことも全くない生徒は 49 名 (30.2%) で、どちらも頻回に経験している生徒は、43 名 (26.5%) である。抱っこ遊びのそれぞれの経験の割合は (表 13) に示す。接触経験を「なし」を 0 点「1、2 回ある」を 1 点、「度々ある」を 2 点とし、遊びと抱っこを合計して最高 4 点とすると、男子の平均は 1.4、女子の平均は 2.4 で、女子の方が経験得点が高い (t=4.03, p<.01)。

### 2) 対児感情の変化

接近感情の平均得点は、体験前 18.5、体験後 20.8 であり、男女ともに有意に高くなっている。また回避感情

の平均得点は、体験前 13.4、体験後 11.21 で在り、有意に低くなっている。それぞれの平均得点および有意水準を (表 14) に示す。

体験学習での体験状況を見ると、一度も乳児に近づかなかった生徒はなく、そばにはいたが「乳児の身体に全く触れず見ていただけ」の生徒が 1 名いた。全体の平均体験項目数は、男子 3.4 項目であり女子は 4.3 項目で、女子の方が有意 (F=2.674, p=.104) (t=3.72, p=.000) に多い。次に、体験項目数 3 未満の少ない群と 6 以上の多い群で、前後の対児感情の変化を見た。体験項目数が少ない生徒は、回避感情得点が体験後 12.3 から 7.6 に減少し有意 (t=3.28, p<.01) に低くなっている。また体験項目数が多い群は、接近感情得点が体験後は 23.3 から 28.8 と変化し、体験後に有意 (t=3.15, p<.01) に高くなっている。(表 15)

体験前の対児感情について接近感情得点と回避感情得点とを比較して、接近感情得点が回避感情得点を上回っていた生徒 (110 名) を受容群、両得点が同じもしくは回避感情得点が上回っている生徒 (52 名) を拒否群とした。そして、過去の接触経

表 12 赤ちゃんが好きかどうかと体験による認識の変化

	好きでない N=89		好きである N=283	
	体験前	体験後	体験前	体験後
赤ちゃんのイメージ				
否定的	55( 61.8)	26( 29.2)	27( 9.6)	20( 7.1)
肯定的	22( 24.7)**	59( 66.3)**	246( 86.9)	252( 89.0)
その他	12( 13.5)*	4( 4.5)*	10( 3.5)	10( 3.5)
無回答				1( 0.4)
子どもを育てること				
否定的	67( 75.3)	47( 52.8)	129( 45.6)	76( 26.9)
肯定的	9( 10.1)**	37( 41.6)**	127( 44.8)	188( 66.4)
その他	13( 14.6)**	5( 5.6)**	26( 9.2)	18( 6.3)
無回答			1( 0.4)	1( 0.4)
母親について				
否定的	61( 68.6)	42( 47.2)	153( 54.0)	99( 35.0)
肯定的	18( 20.2)**	47( 52.8)**	118( 41.7)*	179( 63.3)*
その他	10( 11.2)*	0( 0.0)*	10( 3.5)	5( 1.7)
無回答			2( 0.8)	0( 0.0)
体験について				
否定的	63( 70.8)**	28( 31.4)**	22( 7.8)	19( 6.7)
肯定的	13( 14.6)**	46( 51.7)**	237( 83.7)	253( 89.4)
その他	13( 14.6)	13( 14.6)	24( 8.5)*	9( 3.1)*
無回答	0( 0.0)	2( 2.2)	0( 0.0)	2( 0.8)

(%) \*\* P<.01 \*P<.05

## ■ 考 察

過去4年間の調査結果(調査1)から、「乳児」「育児」「子育て」「親」についてのいずれの項目でも、体験後は否定的なイメージや認識が減少し、肯定的なイメージや認識を持つ生徒が増加しており、実施年度別にも同じ傾向を示している。この背景には、否定的な認識を持っていた生徒が肯定的な認識を持つことに変化した場合と、体験前には具体的な認識を持たなかった生徒が、体験により肯定的な認識を持った場合のあることが示唆された。

参加者の背景を見ると、男子生徒は乳児との接触経験が少ない。また女子生徒については、体験前に乳児と遊んだり抱っこをするなどの接触は見られるが、おむつを替える服を着替えるなどの世話を内容の接触については経験が少ない。このような中高校生が、乳幼児と具体的な接触をする機会を持つことは、乳幼児の理解をする上で効果があると考えられる。アンケートの中でも、体験によりイメージが具体的になった事による認識の変化と、体験を自己に結びつけて考えたと思われる認識の変化が見られる。後者は、親に対する認識の変化に現れている。親に対する認識の変化は、男女別の認識の変化と併せて考えると、男子生徒の認識の変化が大きくでている。これは体験前に乳児との接触経験がなかった男子生徒にとっては、今回の体験学習で乳児についてのイメージを具体的にし、更に育児や親を今までと違った側面からとらえる機会となっていることがうかがえる。

乳児や育児についての感情には、かわいいが憎たらしい、面倒だが楽しいなど相対する感情がどちらも存在していると考えるのが妥当であろう。その相対する対児感情が、体験の前後でどのように変化したか、体験により影響を受けているかについて(調査2)の結果から検討する。

この対児感情の接近感情と回避感情、つまり受

	男子生徒	女子生徒	計
中学生	72(48.3)	77(51.7)	149(100.0)
高校生	12(92.3)	1(7.7)	13(100.0)
計	84(51.9)	78(48.1)	162(100.0)

	なし	1-2回	頻回
抱っこ	60(37.0)	55(34.0)	47(29.0)
遊び	54(33.3)	55(34.0)	53(32.7)

験との関係、体験での体験項目数、体験後の対児感情について、両群を比較した。受容群は過去の接触経験が多く、体験での体験項目が多く、また体験後の接近感情得点は高いことが明らかとなった。ただ体験後の回避得点についての影響は有意とはいえなかった。(表16)

表 14 対児感情の平均得点

	体験前(SD)	体験後(SD)	t検定(df)
接近得点(全)	18.5(9.57)	20.8(9.39)	t=3.96(161)**
回避得点(全)	13.4(7.23)	11.2(7.45)	t=3.92(161)**
接近得点(男)	16.9(8.53)	19.3(9.43)	t=2.92(77)**
回避得点(男)	15.4(7.95)	12.4(8.45)	t=3.06(77)**
接近得点(女)	19.3(8.50)	22.1(9.2)	t=4.43(83)**
回避得点(女)	11.5(5.92)	10.1(6.24)	t=2.51(83)*

\*\*p<.01 \*p<.05

表 15 体験項目数と対児感情

	体験前(SD)	体験後(SD)	t検定(df)
体験(<3)			
接近得点	12.6(7.36)	11.7(8.09)	t=.09(24)
回避得点	12.3(6.84)	7.6(6.23)	t=3.28(24)**
体験(>5)			
接近得点	23.3(10.09)	28.8(6.04)	t=3.15(20)**
回避得点	3.4(6.00)	13.6(7.73)	t=.11(20)

\*\*p<.01

次に性差があるかどうかの比較をすると、過去の接触経験は女子に多く(F=0.417,p=0.519)(t=4.03,p=0.000)、体験での項目数も女子に多い(F=2.674,p=0.104)(t=3.72,p=0.000)。

接近感情得点については明らかな差はなかったが、回避感情得点については、体験前後ともに男子が有意に高いことが明らかとなった。(表17)

表 16 体験前の対児感情による比較

	受容群 (n=110)	拒否群 (n=52)	Levene検定	t検定
接触経験	2.1	1.5	f=.49,p=.49	t=2.24*
体験項目	4.0	3.5	f=.83,p=.36	t=2.03*
接近得点(後)	22.9	16.4	f=4.02,p=.05	t=4.01**
回避得点(後)	10.5	12.8	f=11.47,p=.00	t=1.64

\*\*p<.01 \*p<.05

表 17 性差による比較

	男生徒 (n=78)	女生徒 (n=84)	Levene検定	t検定
接触経験	1.4	2.4	f= .42, p=.52	t=4.03**
体験項目	3.5	4.3	f= 2.67, p=.10	t=3.72**
接近得点(前)	16.9	19.3	f= .00, p=1.0	t=1.77
回避得点(前)	15.4	11.5	f= 2.96, p=.09	t=3.50**
接近得点(後)	19.3	22.3	f= .00, p=.98	t=1.91
回避得点(後)	12.4	10.1	f= 3.56, p=.06	t=1.99*
			**p<.01	*p<.05

容と拒否の感情の相克は、その生徒の体験での動機づけや行動を阻害する方向に影響すると考えられる。今回の調査で、接近感情得点が回避感情得点に比して高くない拒否群は、過去の乳児との接触経験が少なく、また体験学習での体験項目数も少ない結果であったことがこれを裏付けている。体験前に乳児や育児に対して拒否感情を持っている生徒が、体験での行動がとりにくくなるのは当然とも思われるが、このことは意図的な場面設定がない日常生活場面では、なおさら自ら乳児に接触する行動をとりにくいことを示している。

しかし体験項目数の結果では、たとえ体験項目数が少なくても体験後の対児感情に影響を及ぼしている。体験項目数が少ない生徒の回避感情得点が、体験後減少したことは少ない体験でも、乳児やその母親とふれあうことによる効果があると考えられる。

以上のように、体験が中高校生に与える乳児や育児に対する認識の変化や感情を考察した結果からは、効果があることが推察された。この効果が長期的に持続するかどうかについては、早計には断定すべきでないが、過去の接触経験や体験項目数と対児感情の影響があったことから、体験がその後も影響すると思われる。これについては、平成7年度の思春期体験学習の長期的効果の報告で、体験学習は、乳児の接し方がわかり、親しみを覚える効果があると思われるとしている。また、花沢2)も大学生369名を対象にした調査で、小学校から高校までの間で乳児との接触を経験した頻度と対児感情との関係を報告している。それによると多接触群が少接触群に比較して、接近感情得点が高い(t検定, p<.01)としている。これらのことより考えると、長期的に見ても、体験する機会があることは、乳児と接したり育児について考える上で

効果があるといえよう。また長期的な効果を得るためには、体験の機会を一度と言わず持つことが必要であろう。

今後の研究課題として考慮すべき点は、(調査1)の結果から体験により否定的な認識が減少しているにも関わらず、体験後「わからない」が増加している項目がみられたことや、調査2でも少数ではあるが。体験後の対児感情が体験前に比べて拒否的になっている生徒がいることである。これは

実際に乳児に接し、例えば抱っこについて「いや、こわい」というわけではないが「楽しい」といった単純なものでもないというように、育児について多面的に理解出来るようになった現れであると考えられる。これは単に育児が、楽しいことばかりではない事を考える機会となっており、実際の子育てを反映した学習の機会として好ましいとも考えられる。しかし、体験学習の効果に影響を与える因子として、実際の体験場面での関わり方がどうであったのかを考慮すべきであろう。中高校生とくに男子生徒にとって、乳児に関心を持ち続けることは難しく、その場面に関わった母親や保健婦、母子保健推進員、教師等の大人の役割が重要になるだろう。母親からの「上手だね」の一言で積極的に関わられたり、「泣かれてどうしたらよいのかわからない」と戸惑っているのに、大人の助けが得られず乳児から離れる生徒が見られたことから、出来たことが実感できるように援助するという場面での関わり方の工夫が必要であろう。

今回の調査で取り入れた対児感情評定尺度は、個人の変化や体験状況との関係を見る上で、一つの指標となった。体験前の対児感情得点から体験時での対応を考えることに発展できよう。今後は、乳児や育児に対して拒否的で戸惑いが大きい生徒を体験前に知ることにも活用するとともに、同時に調査する感想文と合わせて分析し、体験が効果的になるように援助する方向で検討が必要である。

## 参考文献

- 1) 清水凡生：思春期体験学習の評価に関する研究. 厚生省心身障害研究. 主任研究者林謙治. 望まない妊娠等の防止に関する研究. 平成7年度研究報告書, 1996.3; 345-419.

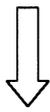
2) 花沢成一：母性心理学. 医学書院,1992;61-105.

本研究に当たり、下記市町村の担当保健婦、並びに調査校の担当教諭、中高校生の皆さまにご協力いただいたことを感謝いたします。

広島県賀茂郡河内町  
広島県豊田郡安芸津町  
広島県豊田郡木江町  
兵庫県多可郡黒田庄町  
静岡県富士市



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 要 約

思春期体験学習は、中高校生の乳児や育児に対する認識に肯定的に影響することがわかった。また、個人の中にある対児感情の接近感情と回避感情、つまり受容と拒否の感情の相克は、その生徒の体験での動機づけや行動を阻害する方向に影響すると考えられた。

接触経験の多さが、乳児に対する肯定的な感情を促進していた。しかし、体験学習における体験項目が少なくとも、乳児に対する拒否的な感情の緩和には効果が期待できると思われた。

今後は、感想文などとの総合的な評価とともに、体験前の対児感情得点から体験時での対応を考えることに発展できよう。